



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

第 5 回高校生車座フォーラム

紅葉も色づき始めた 11 月 14 日（日）、高校生車座フォーラムを開催しました。本事業は、女性研究者支援センターの地域連携ワーキング・グループが中心となって企画を行い、平成 18 年度から開始されたものです。京都大学は高大連携事業や進路選択支援事業を他にも実施していますが、車座フォーラムは、教員や院生と少人数単位で話す対話型を基調にしているのが特徴です。研究者という職業に就いている人、特に女性研究者と接することによって、高校生に研究職の具体的なイメージをもってもらい、将来の職業選択の一つとして考えてもらうことを主眼としています。

京都府教育委員会、京都市教育委員会の後援をいただき、京都府・市近郊の高校生に参加を呼びかけ、今回で 5 回目となりました。京都以外の地域の生徒も、ウェブサイト等を通じて申し込みができますし、第 3 回目より男子の参加も受け入れています。今回は、高校生 25 名（女子 14 名、男子 11 名）に、講師 12 名（女性 10 名、男性 2 名）、ファシリテーションを行う学生 3 名（女性 1 名、男性 2 名）が参加しました。

快晴の午後、医学部キャンパス総合研究棟会場に一同が参集し、地域連携 WG 主査の鈴木 晶子先生の進行のもと、全体会→4 つの分科会→全体会という流れで 3 つのセッションが行われました。全体会では、まず、高見茂 理事補（教育担当）より、現在の大学教育の動向や社会背景について説明があり、フォーラムに参加した高校の生徒と先生、後援の教育委員会、教職員と学生に感謝の辞が述べられました。そして、稲葉 カヨ 女性研

究者支援センター長・理事補（総務・人事担当）の挨拶の後、講師・学生 15 名が、それぞれの研究分野やテーマについて紹



介しました。高校生は、事前に渡した講師のプロフィールや全体会での研究分野紹介をもとに、分科会の質問票に記入しそれぞれの会場に向かいました。分科会では、ウイルス研究の実験方法、ワクチン開発、裁判員制度、有効

な学生指導法など講師の専門分野にかかわる質問や、研究者になった動機、研究以外の時間の過ごし方などについて、約 80 分、率直に語り合いました。そして、他のグループの講師に聞きたいことについて、全体会用の質問票を記入する時間もちました。



研究者と語ろう！

全体会の最初の約 25 分は、各分科会で話された内容や話題が順番に紹介されました。この紹介は各分科会と一緒に参加した学生スタッフが中心に行い、学生スタッフの個性あふれる紹介に座が盛り上がりました。分科会での話題は、各講師の研究の内容に関するものから、普段の研究生生活の様子、研究での苦労・挫折や喜び、進路の決定、研究者心得などにいたるまで、幅広いものでした。次に、地域連携 WG 推進員の久家 慶子先生の快活な進行によって、全体会向けの質問調査票をもとに、高校生からの質問に講師全員が回答を行いました。はじめの約 20 分は、各自の研究・仕事に特化した質問で、免疫学の楽しさ、女性医師の苦労、宇宙の星の数や宇宙旅行の可能性、地球の温暖化・寒冷化、地震予知、最近の若者の傾向や心理学など、各々を専門とする講師の方に答えていただきました。後半約 25 分では、より一般的な質問を取り上げ、高校卒業後の大学を決めた理由、高校のうちにやっておくべきこと、研究者になったのメリット・デメリット、普段の研究生生活や挫折の経験など、講師の方々にご自分の経験や考えを紹介していただきました。最後に、高校生からの質問票にあった、子どもの時に将来なりたかったものを、参加した講師および学生スタッフの全員に何って、全体会を閉じました。この質問の答えは、パン屋、裁判官、マンガ家、建築家などさまざまで、珍回答には会場全体から笑い声があが



りました。全体会終了後引き続き、鈴木先生より挨拶があり、高校生に対して自らの可能性やそれを引き出すための心がけなど、暖かいメッセージが送られ閉会となりました。

参加校

京都府立亀岡高校、京都府立東稜高校、京都府立福知山高校、京都教育大学附属高校

グループと講師

	稲葉 カヨ (生命科学研究科／免疫学)
A	久家 慶子 (理学研究科／地震学)
	大越 香江 (医学部附属病院／消化管外科)
B	鈴木 晶子 (教育学研究科／教育哲学・歴史人類学)
	薄 良彦 (工学研究科／電気エネルギー工学)
	浅井 歩 (宇宙総合学研究ユニット／太陽物理学)
C	山田 文 (法学研究科／民事訴訟法)
	田中 祐理子 (人文科学研究科／思想史)
	佐塚 文乃 (ウイルス研究所・薬学研究科／ウイルス学)
D	伊藤 公雄 (文学研究科／社会学)
	犬塚 典子 (女性研究者支援センター／教育学)
	アスリ・チョルパン、Asli M.Colpan (経営管理大学院／企業戦略・企業統治・国際経営)

学生スタッフ

- ・本塚 智貴 (工学研究科都市環境工学専攻・博士課程 3 年)
- ・菊川 信人 (理学研究科生物科学専攻・博士課程 2 年)
- ・中野 苑香 (総合人間学部総合人間学科・3 回生)



【女性のための相談室 開室日】 利用には予約が必要です。

12月3日、10日、17日、24日

1月7日、14日、21日、28日

2月4日、10日、18日、25日

病児保育室「こもも」から

京都大学教職員・学生の子どもが、病中・病後のため幼稚園・保育園・学校へ登園・登校できない時、保護者が仕事や研究を休むことなく子どもの保育ができる環境を提供することを目的として、2007年2月より病児保育室「こもも」が開設されました。病児保育室は生後6ヶ月から小学校3年生のお子さんで「元気だけれど発熱等のため登園・登校出来ない病中児」「感染症の回復期でまだ集団生活を行えない病後児」を対象にしています。

病児保育室は看護師2名、保育士3名に加え、小児科医1名が担当しています。病児保育室内での相互感染防止等のため、利用には一定の制限がありますが、以前は帰宅していただいていた利用中の高熱、嘔吐・下痢などの児でも、2009年12月の感染隔離室（1室のみ）設置後は、容態次第で継続して保育が出来るようになりました。

ただ、利用者の急増により、5名の定員をオーバーし、お断りせざるを得ないことも増えてきました。

一定の支援が出来ているかと思う一方で、まだまだ不十分なことも多いと感じています。利用するお子さんの安全と健やかな成長を第一とした上で、今後も利便性の向上を目指したいと考えておりますので、御要望などがあれば病児保育室まで寄せていただければと思います。また、インフルエンザウィルス流行期は、感染拡大の防止のため対応を一部変更しています。詳細はホームページを御覧下さい。

病児保育ワーキンググループ推進員 栗屋 智就



女性研究者の国際的ネットワーク

「女性研究者のエンパワーメントと新領域に向けた日米シンポジウム」参加報告

“Connection-Bringing Together the Next Generation of Women Leaders in Science, Technology, Engineering and Mathematics”

研究分野における男女共同参画、とりわけ女性研究者のエンパワーメントは、世界共通の課題となっています。7月5日～7日、日本の国立女性教育会館と米国国立科学財団（NSF）が主催し日米シンポジウムが開催



されました。情報技術や分野融合が拓く科学と技術の創成について、女性研究者間の国際的共同研究を見据え

た意見交換を行うために、日米の女性研究者約30名が参加しました。参加者がそれぞれの研究内容・成果について自己紹介を兼ねて発表するポスターセッション、研究領域ごとに分かれて議論を行う分科会1 “Building Connections to Advance Future Directions of Science & Engineering”、分科会1の議論の結果を踏まえて組織委員が設定した3つの分科会2 “IT Enabled Advances”、“Sustainability”、“Materials by Design”で、中味の濃いワークショップが行われました。

本シンポジウムで形成された Connection によって、研究資金を獲得して共同研究を実施し、米国においても一度シンポジウムを開催することなども検討し、充実した3日間を終えました。今回、アメリカ側は若手研究者が中心であったのに対し、日本側は私を含めて主に教授層に声がかかったようで少し申し訳ない気持ちがいたしました。今後は、日本側も若手研究者がこのような機会を利用できるように働きかけていきたいと思っています。

相談事業ワーキンググループ主査 西村 いくこ

第3回 京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」応募者募集

本賞は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することにより、その研究意欲を高め、もって将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成等に資するために、平成20年度に創設されました。

＜受賞条件＞

本学に所属する女子院生及び女性研究者（ポスドク及び日本学術振興会特別研究員など本学において研究活動を行っている者を含む）のうち、学術上優れた研究成果を挙げたと認められる者（平成23年3月31日時点において39歳以下）

【学生部門】推薦受付締切時、大学院博士後期課程に在学中であること

【研究者部門】博士の学位を取得（博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む）していること

＜推薦＞推薦による応募のみです。

(1) 推薦者は優れた研究実績を有する本学に所属する研究者とします。

(2) 各部門に複数の候補者がいる場合は、推薦部局にて順位を付してください。

＜顕彰＞受賞者は各部門1名ずつとし、賞状と記念品を授与します。

詳しくは、ホームページをご覧ください。



連載：研究者になる！－第29回－



子育てをしながら
実験的研究を続けるということ
理学研究科・助教
中井 郁代

私は理学研究科化学専攻で助教として、「表面化学」という分野の研究をしている。触媒反応に関連して、金属などの表面における

化学反応のメカニズムを解明すべく、レーザー光やX線などを用いた実験を行っている。

現在、2歳の息子を育てながら実験的研究を続ける目の回るような生活を送っている。何とか軌道に乗り始めたものの、実験系研究者としての人生を続けていけるという確信が得られているわけではない。女性研究者の先輩方は、「子育てで大変な時はあつという間で、そのために研究をやめてはもったいない」ということをおっしゃる。しかし、現在の私には「あつという間」ということは全然実感できない。しかし自分も同じ立場になったら同じことを言うのだろう。だから今迷いながら何とか小さい子供を持って研究者として活動している自分の状況と思いを書いておきたい。

私はちょうど10年前に東京大学を卒業し、大学院に進んだ。女子学生が理系の大学院に進み、研究職に就くことは、数こそ少ないものの、特殊なことでは全くない時代であり、また女性研究者及び学生を支援する制度や雰囲気もできつつある時だった。幸せなことに、この連載で先輩方が書かれているような、進学や就職に際しての女性であるが故の苦労や苦悩というものはほとんど無縁であった。

子供が生まれると、状況は一変し、時間的、肉体的にも大変になり、その中で研究を続けていくことの意味を常に自問しながらの日々となった。京都大学に就職してちょうど1年が経ったときに息子を出産し、今は2歳になっている。夫とは離れて暮らしており、普段は息子と2人の生活である。保育園のお迎えの時間で研究の時間が決まっており、家庭でも常にばたばたしている。私が現在行っている実験は、大型の装置を複数使用するような実験で、準備にも測定にも非常に時間がかかる。今は大部分の実験は学生さんに任せているが、それでも、新しいことをする時や装置のトラブルの際には一緒に作業をする必要がある。そんな時は保育園のお迎えの時間が本当に恨めしい。

家族や研究室のスタッフおよび学生たちの理解や支援には本当に支えられている。女性研究者支援センターの事業も、「待機乳児保育室」「お迎え保育」「病児保育」とフルに利用させていただいている。周囲の支援にはいくら感謝しても足りない。ただ、どれほど周囲に支えてもらっても、時間的、肉体的負担はある程度からは自分で受け止めなければどうにもならない。それでも研究を続けたいのかどうかということは、しばしば考えざるを得ない。私が一番やめようかと思ったのは、出産後半年から1年くらいの間であった。出産時に血圧が急上昇した影響がまだ体に残っており、子供の夜泣きもひどかった。常に疲れていた。早めに帰宅するようにし、研究もデスクワーク中心にするようにしているうちに、体調が落ち着き、子供の夜泣きも減ってきて、だんだん研究に打ち込めるようになっていった。書いたことと矛盾するかもしれないが、死ぬほど大変なのはあつという間だったのかもしれない。その後も「やめようか」と思うたびに、この時のことを考えて思い留まり、現在は好きな研究に集中できている。

出産するまでは自分が女性であることを意識することはなかった、と書いた。しかし、そこには嘘がある。学生時代に自分の進路を決めるときに一度考えたことがある。私は学生時代から一貫して表面化学の研究をしている。しかし、研究手段としては、全国に3つほどしかない「放射光施設」という大型の共同利用施設(SPring-8などという施設名を聞かれたことがあるだろうか)を専ら利用するものだった。1年の3分の1くらい東京を離れて茨城県つくば市の施設に行きっぱなしだった。博士の学位を取れる見通しが立った頃、もし将来子供を持つようになった時にこのような実験を続けられるだろうかと不安になった。周りを見渡してもそのような女性の先輩は誰もいなかった。ポスドク先として、全ての実験を実験室で行っている研究室を選んだ。もちろん、その選択の理由の殆どの部分は科学的な興味によるものである。しかし、女性研究者として歩いていくための不安と戦略がその選択を後押ししたことは否定できない。これは良い選択だったのではないかと考えている。おかげで何とか研究も子育ても納得できる形で続けられている。進路に悩む若い方がこれを読んでくださっていれば、女性であることを理由に職種や専門分野を狭める必要はないが、ライフイベントがあってもその道を進みやすい選択肢がもし興味の中にあるのなら、それを選ぶことも検討してほしいということをおきたい。

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>